

調査なし解体 疑問の声

JR折尾駅

JR折尾駅(八幡西区)周辺の総合整備事業を進める北九州市は、日本初の立体交差駅として知られる現駅舎の解体を年内にも始める。貴重な部材は新駅に転用するが、文化財としての価値を調査しないままの取り壊し決定に、一部市民や有識者から「価値によって駅舎の保存方法も変わるはず」との疑問も上がっている。(中西瑛)



文化財としての検証を求める声が上がっているJR折尾駅の駅舎(10月13日撮影)

市民ら「文化財価値知りたい」

駅舎は洋風木造2階建てで、1916年に改築された。大正期に流行した西洋建築を取り入れており、同時代の駅舎で現存するものはほとんどないという。新駅では、大正時代のもので確認された装飾具や円形ベンチなどを活用する方針だ。

市は2006年、自治会や有識者らが駅舎や周辺の街づくりを考える「おりお未来21協議会」を設置。その中の歴史的建造物部会が駅舎の保存について検討した。部会長だった九州共立大の尾道建二名誉教授(建築歴史・意匠)らによると、部会がまとめた報告書では、「文化財指定を検討すべき」として、「『生きた施設』として活用しながら、未永く保全できるよう工夫するべき」と提案したという。

しかし、市と協議会が09

年に打ち出した基本方針では、駅舎の調査は盛り込まれなかった。管轄する折尾総合整備事務所は、「地元の見解を聞いた上での判断。文化財になれば増設などができず、生きた施設として活用できない」と説明する。

一方、市文化財保護審議会は08年7月、「調査が必要」との意見をまとめた。だが、その意見は反映されず、09年12月に開かれた審議会では「調査する機会がなかったことは遺憾」との意見も出たという。審議会委員の1人、清水憲一・九州国際大教授(近代日本経済史)は「国指定の文化財になりうると思う。歴史的な観点も含め、専門家が調査すべきだ」と話す。

10月23日の市議会建築消防委員会では、委員が、駅舎の文化財としての価値を調査しない理由を尋ねると、市の担当者は「文化財指定は所管外」「外観は1985年に大改修した。(貴重なものは)中に残っているものだけ」などとの回答

に終始し、明言を避けた。尾のシンボルとして誇りに駅舎の保全運動を行う八幡西区折尾、蔭田加代さん(53)は「歴史性の高い、折りたい」と訴える。